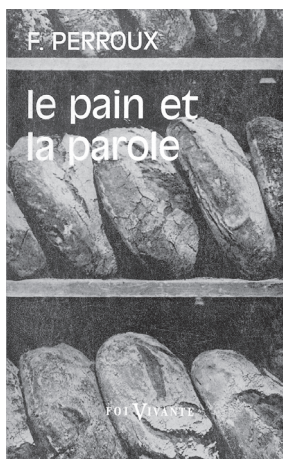


論文

キリスト教と現代経済学についての試論ノート —経済学者フランソワ・ペルーの「パンと福音⁽¹⁾」1969年

勝 俣 誠



“L'uomo ne vive di solo pane

ヒトはパンだけで生きない”

はじめに

キリスト者は時代の社会問題にどう向き合うのか。まずは、長らく南の国々の貧困と格差を見て考える機会に恵まれた私にとって、その問題に正面から取り組んだ人々の中に特に印象に残った2人の聖職者との出会いを記しておこう。一人は、1980年代末、フィリピンのネグロス島にサトウキビ農園の農業労働者世帯の貧困と飢えの問題を調査するために通っていた頃で、マルコス長期独裁政権が民衆デモで崩壊し、新政権による山岳ゲリラとの和平交渉が開始された時期であった。島の教会の中庭で交渉のため下山してきたゲリラの一行の中に一人の神父がい

た。彼は私の足の先から頭までじろっと見て、これが初めて見る日本人だと言った。私の方は、彼に山に入って銃をとることの聖書の根拠はどこにあるかと尋ねた。彼は剣の入手と携帯を正当化したルカ伝の22章35-38を引用した。フィリピンではマルコス独裁時代に、地域の貧困に住民と共に取り組む地区教会を集まるスペースとしたキリスト教基礎共同体 (basic christian community, BCC) が広がったが、この若い神父もある日、村から消えていたことを村人は教えてくれた。もう一人は1994年、コペンハーゲンで開催された世界社会サミットのNGO国際シンポジウムの際に隣に居合わせたニカラグアのスペイン系エコノミストである。私がオランダのハーグにある社会研究院 (ISS) でサバチカル研究滞在をしていると言ったら、その大学院の元同僚であるエコノミストを紹介してくれた。後でこのスペイン系エコノミストは、ニカラグアの長期独裁政権を倒したサンディニスタ民族解放戦線政権の経済計画大臣を務めた神父であることを知った。貧困・抑圧と闘うこのエコノミストに敬意を感じたと同時に、キリスト教と彼の行動を動機付ける思想とのつながりが知りたかった。

本稿の目的はこうしたキリスト者の出会いから生まれた社会科学、とりわけ経済学は西欧の生んだキリスト教という信仰・倫理の価値体系にどう向き合うことができるのかという問を、フランスの経済学者フランソワ・ペルー (1903-1987) の「パンと福音」(1969年、日本語未訳) の解説・考察から答えてみようとする試論ノートである。

まず、明確にしておかなければならないのは、「パンと福音」書は経済学の専門書でもなければ、キリスト教神学や宗教学の書籍ではないことである。本章は、キリスト教、とりわけフランスのカトリックの信者を読者層とするキリスト教関係の一般書・刊行物への寄稿記事を中心に構成されている。

キリスト教研究の一環としてあえてこの非学術専門書を取り上げたの

は、それゆえ、経済学者で同時に敬虔なキリスト者であったペルーが、一般の信者に対して正面からパンと福音という平易なメタファーでキリスト教思想による時代を取り巻く社会現象を解説する術を発信している書だからである。

この問題設定からまず、キリスト教における経済とは何かをペルーの基本的思想から示唆し、次に、そこから生まれる広義の経済に見出される無償性に言及する。そして、特定時代における影響圏の広がりを持つ人々の生き方を律する文明をキリスト教の教理・思想はどのように第2次世界大戦後のヨーロッパとその周辺をシェーブしたかについて考察する。そこでは、産業化、ネーション間の不平等、資本主義に焦点をあてた第4部「福音と創造」を中心に分析と考察がなされる。

まずは4部からなる本書の全体像を概観するため、各章を原語のフランス語と共に訳出しておこう。

まえがき: キャレ神父 Père Carré

第1部: 今日のパン PAIN DE CE JOUR

第1章: 労働と文明 TRAVAIL ET CIVILISATION

第2章: 「白人」の心理的低開発と低開発諸国

SOUS-DÉVELOPPEMENT MENTAL DE L' « HOMME BLANC »
ET PAYS SOUS-DÉVELOPPÉS

第3章: マルクスの階級と「人類の特権」 CLASSE MARXISTE
ET « PRIVILÈGE DE L'HUMANITÉ »

第4章: 平和に向けての労働と諸経済体制間の競合 TRAVAIL
POUR LA PAIX ET COMPÉTITION ENTRE SYSTÈMES
ÉCONOMIQUES

第2部: 社会的挫折 ÉCHEC SOCIAL

第1章: 近代の経済の挫折と人間の進歩の諸機会 ÉCHEC DE

L'ÉCONOMIE MODERNE ET CHANCES DU PROGRÈS
HUMAIN

第2章：富裕化の挫折と効果的な貧困

ÉCHEC DE L'ENRICHISSEMENT ET PAUVRETÉ EFFICACE

第3章：あるカップルの処刑 EXÉCUTION D'UN COUPLE

第4章：死刑廃止 ABOLIR LA PEINE DE MORT

第3部：集団的創造 CREATION COLLECTIVE

第1章：種は自らの家とその寺院を立てなければならない

L'ESPÈCE DOIT BÂTIR SA MAISON ET SON TEMPLE

第2章：“野蛮人”は新たな経済を生む

LES « BARBARES » ENGENDRENT L'ÉCONOMIE NOUVELLE

第3章：創造することは20世紀の天命

CRÉER: VOCATION DU XX^e SIÈCLE

第4章：研究の自由についての簡単な疑問

SIMPLE QUESTION SUR LA LIBERTÉ DE RECHERCHE

第5章：創造の精神と今日の経済

ESPRIT DE CRÉATION ET ÉCONOMIE D'AUJOURD'HUI

第6章：地球規模の経済 ÉCONOMIE PLANÉTAIRE

第4部：福音と創造 EVANGILE ET CREATION

第1章：クリスチャニズムと文明

CHRISTIANISME ET CIVILISATION

第2章：貧困と福音 PAUVRETÉ ET PAROLE

第3章：復活の回勅 L'ENCYCLIQUE DE LA RÉSURRECTION

« Populorum progressio »

第4章：集団的創造と20世紀のクリスチャニズム CRÉATION

COLLECTIVE ET CHRISTIANISME DU XX^e SIÈCLE

第5章：もう一つの存在 AUTRE PRÉSENCE

1. キリスト教に於ける経済とは何か

本書に先立つ1960年、ペルーは「経済と社会－束縛、交換、贈与」と題し、現代世界で広く受け入れられている「経済」とは一体何かという哲学的考察をフランス大学出版で刊行している⁽²⁾。この学術書の執筆理由をペルーは次のように「はしがき」で記している。

「この書物では、私は経済活動の性格とは一体何かを検討した。専門家や大衆向けの無数の文献が、経済活動を金儲けのための交換に限定してしまっている。しかし、経済活動は実際にははるかに豊かなものである。経済をしっかりと観察し、系統的に研究してみれば、いつの間にか我々が慣れきってしまった諸商品社会が映し出す狭隘な経済観に安住するわけにはいかないことが理解される。西欧の諸商品社会は資本原理をベースとした経済の数々の処方箋だけによって繁栄してきたのでは決してない。これらの社会が経験してきた交換とは常に束縛と《贈与》を受け入れてきた⁽³⁾。」

この経済思想史的著作をペルーはクリスチャニズム文明と結び付けて、次のようにこの文明の評価を下している。

「文明とは終わることも完了することもなく、しかし、基本的参照を常に正当化できる卓越した集団的事業として把握される。この基本的参照とは例えば、文明人は殺さない、文明人は自ら豊かになるために他者の命を脅かさない。文明人は万人にあって生命を尊重する諸社会形態を作りあげる。その手始めとして、最も深刻な悲惨状態をなくし、もっとも緊急を要するニーズを満たすことである。これらの一義的真理は教えという形で神のみ言葉を含む原文にせよ、人間の希望を表明する原文にせよ犯してはならない原典に見出され

る。これらは十掟と諸権利宣言において輝いている。かくして、歴史は明らかにこれらの掟を守ってはず、踏みにじっている。「パンと福音」以下PPと略：245ページ」

La civilisation est appréhendée comme une œuvre éminemment collective, qui n'est jamais achevée ni accomplie, mais toujours justiciable des références élémentaires. Celles-ci par exemple : le civilisé ne tue pas, le civilisé ne compromet pas d'autres vies pour s'enrichir, le civilisé construit des formes sociales qui respectent la vie chez tous, *en commençant* par éliminer les misères les plus profondes et par satisfaire les besoins les plus urgents. Ces vérités premières se rencontrent sous forme de préceptes dans tous les textes sacrés ; ceux qui contiennent la parole de Dieu et ceux qui expriment les espoirs de l'homme. Elles brillent dans le Décalogue et dans les Déclarations des Droits. Manifestement, l'histoire viole et bafoue ces commandement.

この文明観に立ったペルーは万人に対する衣食住の充足こそ経済学の使命であるとし、1967年の復活の回勅である教皇パウロ六世回勅『ポプ・ロールム・プログレッシオ（1967年3月26日）⁽⁴⁾』を参照する。西欧人の信者に対するメッセージとして「天のパンと清らかな水 le pain du ciel et l'eau vive」を与える根拠を次のマタイ伝25章34-36節を引用（PP：282ページ）して解説する。

『25:35 お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、25:36 裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』

« J'ai eu faim, vous m'avez donné à manger; j'ai eu soif, vous m'avez donné à boire ; j'étais sans asile, et vous m'avez recueilli ; nu, et vous m'avez vêtu ;

malade, et vous m'avez visité; j'étais en prison, et vous êtes venu à moi » (Mt. 25, 35-36).

この衣食住充足活動を経済の中心に据えるペルーにとっては現代経済生活は何よりもまず、計量化可能なモノゴトの秩序における人間による人間の変革行為として特徴づけられる。この行為は、「我々はたがいに様々な仕方でも活動し合っており、とりわけこれらの行為は個人的ないし集団的計算 *calculs individuels ou collectifs* において熱量、労働、市場価格、慣習価格 *prix conventionnels*、における費用及び効率に帰属されるモノとサービスの組織化を通じてなされる (PP:284ページ)」とする。

この今日、支配的な経済学教科書にも見出される費用、効率、組織化がキーワードとなる経済生活の位置づけを容認しつつも、ペルーは回勅の「進歩についてのキリスト教的見方」という14章を参照して進歩について次のように述べる。「進歩は単なる経済的發展に還元されるものではありません。本当の進歩とは全体的なもの、すなわち個人としての人間全体、および人類全体を進歩向上させることにあるはずで」と経済生活なる現象をより広く把握すべきという主張である。さらにはケインズ経済学での完全雇用といった目標はすでに時代遅れとなっているとも断じている⁽⁵⁾。

この回勅にあらわれる経済生活の再考からペルーは「生命の人間というステータス *un statut human de la vie*」の維持コストとして以下のように説く (PP:284-285ページ)。

「その実現のための諸コストは時代とその土地の風土によって異なるが、考えることのできる人間の生存 *subsistance de l'homme* を律する。これらのコストは身体と精神、基本的教育、己を意識するために不可欠な労働の中断に関係する。すなわち、食べさせること、世話をすること、教育すること、自

由にすることなどである。これらの条件は人間全体にとっていまだ広く満たされていない。したがって、回勅は人類の4つの掟（十戒、回勅の帰結であり、人権宣言のなかに濃縮されている *conséquences du Décalogue et de l'Évangile et condensé de la Déclaration des Droits*）として人々に糧を与え、世話をし、教育を施し、奴隷を解放する *Nourrir les hommes, Soigner les hommes, Instruire les hommes, Libérer les esclaves* ことを定めている。」

かくして、ペルーによるこの全的人間の費用は無償の行為に見出される。

2. キリスト教文明におけるパンの無償性

キリスト教文明において聖書に繁く登場し、ミサというカトリックの儀礼に欠かせないパンに象徴される無償性は、専ら価格と量により財の移動が人間関係のしがらみなく移転する市場原理にはなじまない。ペルーはこの生命を維持するために不可欠な無償性から現代世界に実際に存在している十分に食べられない人びとやその人口を抱える途上国に注目する。そして次のように、この地球規模の不平等とそこから生まれる貧困を直視しない富裕国のキリスト者に以下のように警告を発する。

「今日、我々が観察できるようなキリスト教文明はまだ暴力国家とどん欲経済に打ち勝っていない。かくして、最も神聖なる祈りに耳を傾けず、最も純粋な儀式には無関心であり続けている。我々の「日常の糧たるパン」は人類の3分の2を占める人々には与えられていない。我々は互いの平和のあいさつとしての接吻 (*baiser de paix*) をカタチの上でかわしながら、次には軍備拡大に走っている。キリスト者は一つであらねばならないと一心に唱えながら、残酷な笑いとユニバーサルな破壊のエンジンの轟がこだまして聞こえるでは

ないか。(PP：249ページ)」

Aujourd'hui, la civilisation chrétienne telle que nous pouvons l'observer, n'est pas encore venue à bout de l'État violent et de l'économie avare. Aussi reste-t-elle *sourde aux prières les plus sacrées et indifférente aux rites les plus purs*. « Notre pain quotidien » est refusé à deux tiers de l'humanité. Le baiser de paix, nous l'échangeons symboliquement, puis nous courons aux armes. « Pour qu'ils soient un », « *Ut sint unum* ⁽⁶⁾ » est prononcé avec recueillement, mais en écho on entend des rires cruels et le ronflement des engins de la destruction universelle.

この無償性を検討するにあたり、ペルーは支配的な標準経済学における希少性概念を再考する。実際、教科書的経済学においては希少性の容認こそ経済学の基礎となる。ある経済学辞典では希少性は次のように定義される。「ある財、もしくは資源、サービスなど」が希少であるその財（資源、サービス）の利用可能な量に制約があることをさす。この事実こそ経済学の存在理由であり、限られた資源の効率的な配分法・利用法が追及される⁽⁷⁾」

実際、ペルーはこの希少性前提は産業資本主義の繁栄期にあつて、過剰生産さえ可能にしていると指摘し、次のような問いかけをする。

「数世紀の間に、我々は経済的現実の本質は希少性であると教えられてきた。すなわち、可能な雇用数よりも財の数が少ないということだ。この原則は長続きする過剰生産の際、あるいは広範囲に満たされた基本的ニーズの飽和状態時には、否定される。(…)もし、「豊かさ」と「貧しさ」が朽ちる財が社会的にもはや希少でなくなったためにその物質的イミを失ったら、この経済とは非物質的イミで表現される人間の「豊かさ」と「貧しさ」へと新たな道を開かないだろうか？(PP：273-274ページ)」

On a, à longueur de siècles, enseigné que l'essence de la réalité économique est la rareté, c'est-à-dire en fin de compte un nombre de biens plus petit que le nombre des emplois possibles. Ce principe est nié en cas de surproduction durable ou en cas de saturation de besoins élémentaires largement satisfaits. Pourquoi ne pas prolonger les lignes et demander ce que deviendrait une économie construite sur le principe de rareté si brusquement, cette assise lui manquait ?

ペルーは資本主義にせよ、ソ連の社会主義にせよ、大量生産・大量消費によってモノがあふれる社会が実現した時、この前提は崩れ、従来正面からの考察対象にならなかったが、すでに事実として定着している無償性の実践にこそ注目すべきと次のように説く。

「我々がそれ（無償性：Note by Author）に気づかないのは、我々は商人社会とその思考パターン図に目を奪われているからである。我々はすべてはお金によって支払われると信じているのだ。世の中にただのものは無い。悲しいかなこれがおおむね真実なのだ。しかしながら、お金中心社会は公共および社会経済によって支えられている限りにしか生き残れない⁽⁸⁾。(PP：273ページ)」

Si elle échappe à notre attention, c'est que nous en sommes distraits par les schémas de la société marchande. Nous croyons que tout se paye. « Rien pour rien. » « Nothing for nothing. » C'est tristement vrai le plus souvent. Pourtant la société mercantile elle-même ne résiste que parce qu'une économie publique et sociale la soutient.

かくして、ペルーは西欧社会を人間化して、キリスト教信仰を決意した者の明白な義務として、無償性に基づいたクリスチャニズムが支える

二つの無償性の根拠を提示する。

ひとつは、未完の無償教育の拡大である。ペルーは各人が知識を身に着ける基本的権利を有するがゆえに、万人にこの権利が与えられる必要があるとし、次のように説く。

「世代間に引き継がれる貧困をなくす手段の一つは知的選抜を伴うがあらゆる社会的差別を排除した全般教育に他ならない。(…)このことは、教育政策が当面の労働者の完全雇用政策を超えて、国民全体の潜在的労働力の全面開花に貢献することである。(…)各人は自己の意識と自由な判断にアクセスできる合理的知識の普及である。(PP: 275-276ページ)」

L'un des moyens d'éliminer la pauvreté, transmise de génération en génération, est précisément l'éducation généralisée comportant une sélection intelligente, mais excluant toute discrimination sociale. (...) politique de l'éducation, qui au-delà, du *plein emploi* des forces de travail disponibles, serve le *plein développement* des forces de travail virtuelles de l'entière nation. (...) la connaissance rationnelle qui permet à chaque homme d'accéder à la conscience de soi et à la décision libre.

この教育の無償化についてペルーは、キリスト教神学者のジャン・ムルー、Jean Mouroux (1902-1973年)の「社会へ巣立つための財・機会の平等のための諸財 biens de départ」という表現を援用している⁽⁹⁾。この表現は今風で言えば、ますます専門化・分業化が進む資本主義産業構造の中でも若者が人間性を失わない労働を見出していく上の若者層向け無料スタートアップ支援ともいえるであろう。

もうひとつの無償性の根拠は、定義が難しいが、創造的エリートが存在である。ペルーは「日用の糧」を無償で供与されるべき創造活動に携わる自己の富裕化を動機としないエリートの存在を、「必要は発明の母」

といった創造活動における苦渋生活の効用論を排して次のように擁護する。

「研究者、技術者、アーティストは日常の生活苦の制約から解放されねばならないとし、もし、無償の思想が社会的に組織されれば、それは富でも貧困でもなくなる。それだけの努力をして無償性に与えられるものは“解放”されるのである。そのとき当人はブルジョワ文明的意味の金持ちでも、貧乏人でもなくなるのだ。(PP：276-277ページ)」

des élites de chercheurs, de techniciens, d'artistes, devraient être à mon sens délivrées des tyrannies de la vie besogneuse. (...) socialement organisée, elle n'est plus ni richesse ni pauvreté. Celui qui en bénéficie après l'avoir méritée est libéré ; il n'est plus ni « riche » ni « pauvre » au sens de la civilisation bourgeoise.

このバレーのエリート擁護論の背後には、質素な生活と喜捨で精神や思想を深めるカトリック修道院や公共政策の一環として税金で賄われる真理のみを求める科学者・知識人を育てる大学や研究機関が社会的に有用であるという、伝統的な西欧文明における知識人の形成史に根差しているように思われる。学問の持つべき非世俗性を「知識人」として論じたジュリアン・バンダの「知識人の裏切り⁽¹⁰⁾」は、英語訳は Treason of the Intellectuals であるが、原語のフランス語では La Trahison des Clercs と知識人と聖職者とが同義語として使用されている。

3. キリスト教と資本主義

市場原理からは導き出されない人類の基本的ニーズの無償性の必要は信仰から導き出される贈与行為に行きつくが、贈与を支える宗教と資本

主義の関係については本書ではどう説明しているのだろうか。

古典としては、イスラームは資本主義の誕生をなぜ地中海世界においてキリスト教に譲らなければならなかったかという問を立てたマキシム・ロダンソンの「イスラームと資本主義」と、宗教改革を断行したプロテスタンティズムこそが資本主義の精神を生んだとするマックス・ヴェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」などが挙げられる。しかしどちらも西欧において資本主義が発達を遂げたかを広域宗教の影響から考察することが中心課題で、絶えず進化を遂げる資本主義のダイナミズムの孕む非人間性ないし非倫理性について言及しながらも主要課題としては提起していない。これに対して、本書第4部では20世紀の資本主義の拡大を支えた所有と自由貿易という二つの社会科学の基本概念に注目して、その批判のキリスト教的根拠を提示している。

まずペルーは教会の伝統的教義を引き継ぎ、発展させてきた前出のパウロ6世の1967年3月26日の復活祭回勅「*Populorum progressio*」に依拠して、この所有と自由貿易を以下のように位置づけている。

「大地と大地が含むものは神によって人々に供される。従ってこの使用を利する諸制度は、原則の実現をより助けることこそあれ、決して妨げてはならない。所有と自由貿易は万人のためにある。

従って、諸国家が自国民の天然資源に及ぼす集団の独占と所有者が生産諸手段に及ぼす独占は、根本的に異議を唱えなければならない。(…) 一国、国際ないし世界規模の秩序は一貫した普遍主義にとって唯一かつ分割できない。一国内の一階級のあるいは一集団の一国のみの経済発展は完全なる発展として確信できる約束とは言い切れない。こうした精神的前提は科学的分析に耐える証拠を有している。(PP: 287-288ページ)」

la terre et ce qu'elle contient sont destinés par Dieu à l'usage des hommes :

les institutions qui règlent cet usage favoriseront donc et n'entraveront jamais la réalisation du principe. La propriété et le libre commerce sont au service de *tous*. Par conséquent, les monopoles collectifs que les États exercent sur leurs ressources nationales et le monopole du propriétaire sur les moyens de produire sont radicalement contestés. (...) L'ordre national, international ou mondial est *un et indivisible* pour un universalisme cohérent. Le développement économique d'une classe dans une nation ou d'une nation dans un groupe n'est même pas la promesse certaine du développement plénier ; cette proposition morale trouve des appuis solides dans l'analyse scientifique.

3-1 回勅における私的所有

ペルーは回勅における私的所有について先進国社会の事例を解説する。所有の正当性を利潤の追求に一義的に求める企業において、その所有者と経営者を区別して、経営者こそが企業の統治者として最も専門性があり、最も能力のある者が正統に経営するのであって、必ずしも所有者ではないとする。では誰のために経営し、統治するののかという問をペルーは立て、それは人々からなる集合体全体であって、単に顧客や、メーカーや企業の従業員のためだけではないと明言する。

「思考の欠如により、危機的状況にある世界にあって」(回勅第85節：日本語訳26-27ページ)、企業の経営・統治者の役割は、コストを削減し、価格を下げ、良質な新製品を製造することであり、「ブレーキの無いリベラリズム」でも「お金心の国際帝国主義」(回勅第26節：日本語訳29ページ)の利潤でなく、職務上の職分的利潤 *profit fonctionnel* であるとする。ペルーにとって、この完全なるイノベーションを手掛けるこの利潤こそが完全なる発展 *développement* の

必須条件の一つとなる。(PP：289ページ)」

Dans le monde « *en malaise, faute de pensée* » (Populorum progressio, n° 85), on finit par oublier que l'entrepreneur (le gestionnaire, le gouvernant de l'entreprise) a pour rôle de comprimer les coûts, d'abaisser les prix et de fabriquer de bons produits nouveaux ; le profit de ces tâches, loin d'être le profit du « libéralisme sans frein » et de « l'impérialisme international de l'argent » (Populorum progressio, n° 26) est le *profit fonctionnel*. C'est celui-ci qui met en œuvre la pleine innovation qui est l'une des conditions maîtresses du plein *développement*.

この回勅では、私有財産権は誰にとっても無条件かつ絶対的な権利でない、聖アンプロジウスの言葉を次のように引用している。

「あなたが貧しい人に施しをするときには、あなたのものを与えているのではない。なぜなら、すべての人がともに与えているものを、あなたはひとり占めしているからである。地はすべての人のものであり、決して富める者だけのものではない。(回勅23：日本語訳：26-27ページ)」

フランス語版では以下となる。

« Ce n'est pas de ton bien, affirme ainsi saint Ambroise, que tu fais largesse au pauvre, tu lui rends ce qui lui appartient. Car ce qui est donné en commun pour l'usage de tous, voilà ce que tu t'arroges. La terre est donnée à tout le monde, et pas seulement aux riches (23).⁽¹¹⁾ »

ペルーによるこの引用は決して自らの労働の所有から可能になる個人の物質的富裕化とその意図を否定しているのではなく、新約聖書におけ

る「貧者」に対する福音を引用⁽¹²⁾しつつ、「福音 Paroleは合理的で技術を有し、第二の本性を形成することのできる人間の斬新的成長を受け入れ、かつ薦めさえしている(…)大切なことはこの人間がありふれた富裕化か、それとも福音の成就に自らを開く物質的、知的、道徳的条件を満たす完全なる富裕化を選ぶか否かを知ることである(PP:262ページ)」とする。

J'admettrai que la Parole accepte et même recommande la croissance progressive de l'homme rationnel et technicien, capable de former une seconde nature. Il s'aide de machines et d'outils ; il s'entoure d'instruments qu'il comprend tout autrement que les processus naturels, parce qu'il les a conçus. Il gagne en précision, en puissance, en vitesse ; co-créateur du monde, il s'agit de savoir s'il préférera l'enrichissement banal ou cet enrichissement plénier : matériel, intellectuel, moral, qui l'ouvre aux accomplissements de la Parole.

3-2 自由貿易

さらに、自由貿易に関しては、ペルーは財なるものはすべての人間に与えられるという原則から、自由貿易原理を否定していない。彼の批判的考察は「自由貿易」という名において、実際は経済軍事強国の企業が自国の軍事的擁護の下で自国製品を買わせたり弱小国の資源を低価格で輸出させるために弱小国市場を解放させる帝国主義型自由貿易に向けられる。そこで彼が注目するのは、各国が自国資源と主張する鉄、石炭、石油、ウラニウムといった諸資源は市場によってすべての国に自由に供されるという自由主義・リベラリズムの伝統的立て前と実際には領土主権に立ったネーションによって区画されている国際貿易の現実との乖離

現象である。この現実とは海外市場は制約なく利潤を追求しながら、自国民の発展も、原料や一次産品を提供してくれる住民の発展も助ける義務を負わない大国と大企業によって支配されている（PP：289-290ページ）と、不平等な国際経済秩序を批判している。

Quant au libre commerce, comment le soumettre au principe de la destination universelle des biens, sinon en comprenant à fond l'inégalité des nations et de leurs membres ? Le découpage en nations, produit d'une histoire tourmentée, est tout à fait irrationnel dans l'ordre économique. Un État national dont la terre contient du fer et du charbon, du pétrole ou de l'uranium prétendra volontiers que ces ressources sont les *siennes* : il ne peut en être autrement tant que s'affirme la souveraineté territoriale, héritée du xviii^e siècle et inadaptée aux réalités présentes. Le libéralisme disait naguère : les ressources de chacun sont mises également à la disposition de tous par le marché : on sait aujourd'hui que les marchés extérieurs, sont dominés par les grandes nations et les grandes firmes ; poursuivant le profit sans frein, elles ne sont dans l'obligation de favoriser ni le développement de leur propre population.

このように、ペルーは自由貿易の章でネーションステートを単位とした市場原理を通じた商品の自由な移動を容認し、その原理を十全に機能させるためには強国が小国を支配しようとする現実世界の非対称的な支配・被支配関係を是正する必要があるとする。この問題設定は優れて南北問題や第三世界論（グローバルサウス）の中心課題であるが、本稿ではその考察は割愛し、ペルーのこの自由貿易の倫理的根拠を探るとき、キリスト教の正当価格 *just price* 論に帰することができよう。

もっとも、このキリスト教生活とそれを支える必需品の消費・生産・

流通を律する市場との共存思想はペルーだけの指摘ではなく、キリスト教徒が圧倒的なイタリアでも、キリスト系エコノミストからも2000年代に入って一国レヴェルの分析として展開されている。協同組合経済史家のアルベルト・イアーネスはその著書「イタリアの協同組合」執筆の根拠をベネディクト16世教皇の2009年の回勅「真理に根差した愛」に求めている⁽¹³⁾。この回勅は協同組合を共通善およびより適正な経済社会を促進しうる事業として位置づけている。イアーネスによれば資本を動員し利潤を専ら追求する歴史的に形成されてきた資本主義という体制を、専ら個人的利益を最大化する人間として明快に定義する「経済人間」だけではない動機からも営まれる市場経済と区別する。その動機とは共鳴、共感、連帯といった現実の個人感情の複雑さにも由来する。そこからこのエコノミストは資本主義による社会的弊害の克服を生み出された市場経済を活用した相互扶助運動・協同組合運動に見出し、第4章で言及する「市民的市場経済」型社会企業を提示している⁽¹⁴⁾。

4. 産業資本主義における人間の集団的創造について

欧州が第2次世界大戦の廃墟から戦後復興を経て高度成長期に入的过程中で、ベビーブームと農村から都市への労働移動を伴う産業における賃労働関係が農業大国フランス社会を大きく変革していく。この戦後から石油ショック前までの30年間は、この期間の工業生産力の急速な拡大と賃金労働者の生活水準の上昇から「栄光の30年、Les Trente Glorieuses」とも呼ばれ、産業労働組合運動を通して賃上げを要求する労働者層と技術革新によって生産性の上昇を実現できた資本・経営層の間に、断絶ではなく広範な妥協が成立した時代であった。この産業資本主義のいわば蜜月に立ち会ったペルーはこの労使ともに協力し、産業化・工業化 industrialisation を推進する現象を「集団的創造」と肯定的評価を下す。

しかし同時に、この産業組織下の人間が労働内容の専門化・分業化の加速現象を通して自ら部品化してしまうことをペルーは危惧した。

この産業化への危惧は第一部「今日のパン」の第3章「マルクスの階級と「人類の特権」 CLASSE MARXIANNE ET PRIVILÈGE DE L' HUMANITÉ」において表明される⁽¹⁵⁾。

ペルーにとって産業化は次の二つの避けることのできない問として、テクノクラートエリート集団と大衆をどのように結びつけるのか、および現実的かつ革新的な政策によって決める「集団的創造 création collective」という一つの事業に向けてどのようにテクノクラートエリート集団と同盟関係になった大衆を解放するのかがある (PP : 58ページ)。ペルーは当時、階級闘争を乗り越えたとする、同じく急速な生産力の拡大を達成していたソ連 (現ロシア) における社会主義経済体制を意識して、その体制をイデオロギー的に支えるマルクス主義の弁証法的唯物史観と階級分析には依拠しない産業社会における人間の脱疎外化 (= 人間回復の道) を以下のように展望する。ペルーはマルクス流の階級闘争よりも革新テクノクラートの諸政策が決める集団的創造 création collective によってこそ地球規模の脱プロレタリア化 déprolétarianisation が可能になると示唆して、この集団的創造事業実現条件を次のように提示する (PP : 58ページ)。

- ①その機能は二つの階級という二分法の図式からは程遠い集団的諸制度・組織構造 structures collectives による。
- ②単純な歴史的弁証法によっては断じて位置づけられない政治的創造のイニシアチブが取られる。
- ③その展望はあらゆる産業環境で極めて似通った手続きを採用する集団的脱疎外化 désaliénations collectives であろう。

この指摘は1955年フランスで出版されたフランスの哲学者・ジャーナリスト・批評家のレイモン・アロンによる「知識人のアヘン」におけ

る、ソ連の社会主義体制下の人間像批判と体制イデオロギーとして有名な「宗教はアヘンである」であるというマルクスの言葉を皮肉った言説と重なる⁽¹⁶⁾。レイモン・アロンはその後の「回想録」でもマルクスの「社会主義のみが共同体への人びとの要求を満たすであろうし、そのみが人間相互並びに自然との融和をもたらすであろう⁽¹⁷⁾」というイデオロギーを批判し、そのための変革の主体たるプロレタリアート階級という実体化された概念も否定する。このマルクスの予言への批判は、ペルーによる本章の末尾での「我々の産業社会の中に疎外と人間化の現実を刻印することによって、『階級』は『人類の特権』を有しているなどということは疑問に思えてくる」というくだりと重なる。

En scrutant les réalités de l'aliénation et de l'humanisation dans nos sociétés industrielles, on doute que la « classe » ait le « privilège de l'humanité ».

では、産業資本主義の生む膨大な賃金労働者層が単なるいわば一元的な階級概念に帰されないとしたら、これらの層はどのような可能性を持つのであろうか。ペルーは西欧における資本主義体制下で展開してきた貧者の集団を「西欧では、最も多く、最も弱く、最も貧しい人間の諸集合体は『上昇すること』を夢見て、実際に『上昇している』。彼らは自分たちの物質的水準を上げることを望んでいるが、また同時に権力に参加することも望んでいる、すなわち自律的な決定と現実の自由を行使できることだ (PP : 314 ページ)」という立身出世主義 (PP : 314-315 ページ) として分析する。

この人々が希求する時代思想についてペルーは集団的創造をクリスチャニズムと関連づけて、二つの時期に分けて論じている。

①18世紀末から19世紀全期

ペルーはこの時期を「労働者階級と労働界は『パンと福音』のために、物質的によりよく生きるために、シテの中に伍するために闘いを通して勝利してきた la classe ouvrière et le monde du travail ont lutté victorieusement pour le pain et pour la parole, pour vivre mieux matériellement et pour prendre rang dans la cité. (PP : 314ページ)」時代と位置づける。そして、「長きにわたり、単なる無言の道具に過ぎなかった彼らの労力なくして、社会は決して存続できなかった。社会はいまだその言葉に脅しをかけている、その彼らの言葉なくして、社会はますます衰退するかもしれない。これらの成果はまだまだ持続していかねばならないと思われる。Jamais la société n'a pu subsister sans leur labeur qui fut si longtemps celui d'ustensiles muets ; elle peut de moins en moins prospérer sans leur parole, bien qu'elle s'efforce encore de l'intimider. Ces résultats semblent devoir être durables. (PP : 314ページ)」と都市貧困層の社会的闘争によってはじめて自らの尊厳を勝ち取ったとその闘いを正当化し、推奨さえしている。

②20世紀後半期

この時期に関してペルーは時代の社会的上昇は西欧資本主義国内の社会関係のみならず、植民地支配から独立した新興独立国と旧宗主国の関係（南北問題）を視野に入れて、次のようにこの時期の特徴を記す。

「遅れてかつ長い間抑圧されてきた諸人民は物質的幸福を要求し、自らの運命を律する討議に参加する決意をする。産業なき巨万のプロレタリアートが苦しみ、叛乱する D'immenses prolétariats sans industrie souffrent et se révoltent 彼らの労働条件は工場労働者の条件とは似てもつかない。これらのプロレタリアートを解放できるのはマルクス主義的意味での階級闘争ではな

い。彼らの上昇は自分たちのネーションと単純な関係に置かれていない。これらのネーションの国民生産は資本主義的ルールの適用や外国諸勢力の要望にしたがって、恵まれない階級の生活をほとんど改善することなく増加できるかもしれない。従って、社会的単位としてのネーションの上昇は抑圧され、不満の高まっている諸階級の改善されることなく、平均所得や国力などの潜在指数をものさしとする限りにおいてのみ可能になる。すなわち、これらの階級が属しているネーションが「上昇」していると主張することは、結局のところ自国の支配階級と中間層だけが得をしているということであり、自国を構成するメンバー全員が社会的上昇に十分な形で参加している訳ではないのである。(PP: 314-315ページ)

ここでペルーは、1960年代前後のアフリカ大陸を中心とした旧宗主国である英仏の植民地の独立の内実について、マルクスの階級闘争論やレーニンの帝国主義論を援用することなく、新たな「南」のネーションの自国のプロレタリアートの福祉ないし基本的ニーズの充足の使命を提示する。そこでは、「南」の諸国が単に自由貿易や旧宗主国や他の欧米からの大企業の投資によって経済成長を吊り上げることが可能だとしても、すべての「国民」の生活改善が実現するわけではないと、当時の経済成長論ないしやがて本格化する経済開発論に警鐘を発する。ペルーにとって *développement* とは、人間全体の開花をも含む発展を意味し、単に貨幣所得の増大を狙う経済成長 *croissance* と呼ばれる価格によって計測可能な活動ではない⁽¹⁸⁾。

また、ペルーの使用する「階級」及び「プロレタリアート」概念は旧宗主国フランスの植民地から当時独立したアフリカ諸国の国民経済 *national economy* の形成、とりわけアフリカ社会主義の実現に際して大きな論点になったことも記しておく必要があるだろう。資本主義体制下での被支配階級は「南」と「北」では必ずしも同じ性格を持たない。経済

発展が遅れ従属的資本主義を強いられてきたアフリカ地域の「賃労働者階級」及び何ら生産手段を持たない「無産階級」は進んだヨーロッパのような資本主義の社会階層化と異なる。この後進地域では圧倒的な農民層に対して大都市在住の賃金労働者階級はしばしば雇用が比較的安定し、外国援助の窓口となって富裕化した官僚ブルジョワジーと共に特権マイノリティー層を形成していた。従ってペルーの使用した「産業なき巨万のプロレタリアート」とは欧米日で見られた資本に能動的に対峙する賃労働者層ではなく、工業化が未完の低開発国(旧植民地)社会の底辺を形成したマジョリティーとしての農民や都市雑業層として捉えるべきであろう。

いずれにせよ、ペルーはマルクスの唯物史観による社会展望、より具体的には当時のソ連邦で手掛けられていた社会主義の道に与することなく、これらの膨大な貧民層の救済の必要性をキリスト教の隣人愛や国際協力から正当化しようとしたと言えよう。

結びにかえて——経済学者はキリスト教を支える 人間・隣人救済にどう有用でありうるのか

以上、社会科学の中で「資本」、「労働」、「資源」、「貨幣」、「価格」といった数量化可能な、従って可視化と操作可能な少ない語彙でその相互の関係を精緻化し現代社会の性格と方向に決定的影響を与えてきている経済学は、キリスト教という西欧文明を支えてきた信仰・倫理の価値体系にどう向き合うことができるのかという問をフランスの経済学者ペルーの著書「パンと福音」を参照して考察しようとした。

まず指摘できるのは、主として1960年代のヨーロッパと世界の出来事を強く意識して、フランス革命の生んだ「普遍的価値」に依拠した普遍文明大国のフランスから、フランスのキリスト教信者に向けた一般書

としての本書はおのずから時代的制約を伴っていることである。やはりこの時代に生まれたフランスの官庁エコノミストが主導したレギュレーション学派はこの時代を、資本主義の歴史の変容において労使協調・妥協に特徴づけられた「フォーディズム期」と命名した。しかし今日、金融のグローバル化によって特徴づけられる「ポスト・フォーディズム期」において、産業社会の社会問題を従来のクリスチャニズムへの参照を通して論じることは、本書で言及される時代的制約から無理があるであろう。

しかし、グローバル化した金融中心資本主義の生む数々の社会的および地球環境的負の作用は、今日ますます支配的になっている「経済人間」の根本的再考を迫っている。経済的思考とは個体たる人間が社会で生きていくうえで不可欠な財やサービスに値段をつけて商品として売買することによる希少性の創出であり、経済人とはその思考による判断を疑わず社会内で行動する人間像である。金融資本主義はペルーの時代に比してその度合いと規模が拡大こそしたものの、資本主義という利潤原理を追求する運動そのものを覆す現象ではなく、むしろ先端技術による認知機能を含めた全身体機能の商品化に向かう進化現象と位置づけるべきであろう。この意味で、ペルーの本書を貫く思想には経済の持つより深い意味を付与しようとした動機が強く働いている。

生身の人間は時間と空間の交差する場 (place) でしか生き残れない。従って本来、種及び動物としては実存し得ない人間の行動の一側面をあたかも人間全体ないし人格のごとく仮定して理論構築と精緻化にいそしんできた経済学を支えてきた基本概念を、キリスト教思想から批判的に吟味したのが本書であろう。

本書のタイトルの「パン」とはパン屋やスーパーの棚に並べられる値段のついた単なる安くておいしくて安全な商品としてのパンではない。何よりも生身の人間が生きていくうえで不可欠な「日用の糧⁽¹⁹⁾」であり、

万人にアクセスされなければならない、人々の間で分かち合う「財，善， bien (フランス語)， good (英語)， beni (イタリア語)」⁽²⁰⁾である。この聖書における「共通善」は「人々を養い nourrir」という営為にとどまらず，「人々を介護し soigner」，「人々に教育を施し instruire」，「奴隷状態にある人々を解放する libérer」という行為によって実現する。そして「福音」とは経済学者というより，キリスト教を信じる広き一般の信者を読者層として想定し，その行いの根拠として説かれる。

かくしてペルーにとっては経済とは，人間が生きるために必要な営み・行動として捉える広い経済の概念を設定している。歴史において人間生活を支える財とサービスの移動は市場交換だけでなく，国家といった公共的権力による束縛による配分と無償の行為としての贈与を通じて実際に行われてきたし，現在も行われているとする。その際の人間行動の動機について，単なる物欲や立身出世を問題視しない支配的な経済学を批判し聖書やローマ教皇の回勅を参照することによって，人間とその社会の実像により迫ることができると説く。

もともと，本稿は繰り返す如く試論ノートの域を出ていない。本書を読み解きながら，西欧文明の生んだキリスト教の教理が示唆する現世界の解読ツールの奥深さに改めて圧倒された。キリスト教神学でも，キリスト教史でも，哲学の専門家でもない筆者があえて現代経済学批判をキリスト教の思想から試論として試みたのは，幼年期から2000年代までキリスト教のミッションスクールに身を置いていながら，社会変革の思想としてのマルクス経済学に関心を持っていても，キリスト教思想を背景にヨーロッパを中心に展開されてきた社会変革思想をエコノミストとして正面からたどる作業は手がけてこなかったからである。この試論ノートはその意味で多くの課題を残している。

最後に，とりわけ筆者が緊急を要すると思われる三つの現代資本主義の課題を示唆しておこう。ペルーの時代には顕在化しなかった①「北」

の富裕国の経済活動を主因とする地球環境の破壊, ②平和利用にせよ, 自己の防衛手段にせよプロメテウスの破壊力を持った核エネルギーの維持と拡散, ③ITとAIの進化が加速化しますます細分化される労働内容を担う組織内の個々の人間の疎外, である。これらの現象の解読は支配的な経済学や社会科学の枠組みだけでは極めて不十分に思われ, 多様な世俗の豊かさに容易に還元できない精神世界の豊かさを復権させることのできる知の枠組みを探ることの時代的課題の所以である。ヒトは食べないと生きていけない。これはすべての生きとし生ける存在に当てはまる真実・現実である。これを保障する経済の使命とその動機の行き過ぎへの警告, これが本書のメッセージであろう。イタリアでは誰もが知っている「*L'uomo ne vive di solo pane*」である。

《謝辞》本試論ノートの執筆に関連して, 2022年12月18日明治大学駿河台校で開催された日仏経済学会年次全国大会にて「フランス経済学者フランソワ・ペルーの経済思想とカトリシズム」と題する報告をする機会があった。この際, 東京音楽大学客員教授 竹内佐和子氏にペルーの「人間の費用」や「システム」の定義などについて貴重かつ鋭いコメントをいただいたことに感謝したい。

注

- (1) フランス語の *la Parole* の訳は「福音」としたが, 「み言葉」という訳も考えられる。François Perroux, “Le pain et la parole”, Les éditions du Cerf, 1969年。
- (2) *Economie et société — Contrainte, Echange, Don*, Presse Universitaire de France, Paris, 1960年。邦訳は, フランソワ・ペルー 著; 岡山隆, 堀川マリ子, 堀川士良 訳, 「経済と社会」, ダイアモンド社, 1962年がある。
- (3) François Perroux, 同上, フランス語オリジナルからの筆者訳, 1ページ。
- (4) *Populorum progressio*, 1967年, 教皇パウロ6世回勅。フランス語版は,

Populorum Progressio (26 mars 1967) Paul VI (vatican.va) (2022年8月27日閲覧), 邦訳は『ポプロールム・プログレッシオー諸民族の進歩推進について―』(1967年 中央出版社〈現サンパウロ〉, 上智大学神学部訳)

- (5) 「パンと福音」286ページ。しかしケインズ経済学に対するこの批判的記述は大いに論議があることで、いずれ別の論考でケインズ経済学の功績ととりわけそこで提起された技術進歩と人間の関係を論じたい。
- (6) カトリック中央協議会のHPから「分裂の不幸な歴史をもつキリスト教にとって、つねに重大な課題である一致。これまでのエキュメニズム運動の歴史を振り返りながらその成果を列挙し、今後の課題と完全な一致への道のりを示して、希望をもって不一致の克服をめざします。【原文の発表年月日】1995年5月25日」
- (7) 金森久雄, 荒憲治郎, 森口親司編, 『経済事典』第3版, 有斐閣, 2000年, 210ページ。
- (8) 経済学者宇沢弘文はソースティン・ヴェブレンの制度主義に依拠して、支配的な新古典派経済学に立った経済活動が環境と社会全体に及ぼすマイナスの影響を分析・考察し, 社会的共通資本という概念を提案した。このエコノミストの娘である占部まりは父の業績を次のように簡潔に紹介している。「数理経済学を基礎に, 人々がゆたかに暮らせる社会を構築するためには経済学者の立場から, 何ができるかを考え続けていました。人々がゆたかに, そして持続して発展していくためには, 社会的共通資本, つまり, 生活の基盤になる教育, 医療, 司法, 自然などは市場に乗せてはいけないという考え方です」。さらに彼女はカトリック教会との関係を「ローマ法王が100年に一度出すという, レールムノヴァールムという回勅のアドヴァイザーとしてバチカン市国に招かれたことがあります。1891年は「資本主義の弊害と社会主義の幻想」, というタイトルだったのですが, ソビエト連邦の共産主義的な支配に対し, 各地で暴動が起きており, それを踏まえ「社会主義の弊害と資本主義の幻想」というタイトルを進言しそれが採用されました。1991年の事で, その8月に8月革命が起こり, ソビエト連邦の共産党が壊滅するのです。100年たったらまるっきり逆さまなわけで, 既存の資本主義, 社会主義を超えた社会制度を構築しなければならないと考えるのは自然な流れでした」。さらに, 占部はこの社会的共通資本を三つに分けて以下のようにまとめている。「河川や海洋, 森林などの自然資本, 道路や公共交

通機関などの社会的インフラストラクチャー、医療、教育、資本などの制度資本の3つです。これらの資本は、市場に乗せ、利潤を求めると、それが本来求められているものから離れて行ってしまいます。消防を例にとれば、火事の消火作業の回数で、報酬を決めるという形になったら、市民の生活の基盤としておかしなことになるのは容易に想像できると思います。教育、医療の成果を金銭的価値に換算するのは不可能なのです」

社会的共通資本—宇沢弘文の遺産—持続発展可能な社会のために医療集団がすべきこと、宇沢国際学館、2016年8月8日 MRIC by 医療ガバナンス学会 Vol.180, <http://medg.jp>

- (9) Jean Mouroux, *“Je crois en Toi; la rencontre avec le Dieu vivant”*, Paris, Le Cerf, 1965 (coll.: Foi vivante).
- (10) 宇京頼三訳、『知識人の裏切り』, 未来社〈ポイエーシス叢書〉, 1990年。
- (11) 回勅 *Populorum progressio*, フランス語版の(注22), De Nabuthe, c. 12, n. 53, P. L., 14, 747. Cf. J. R. Palanque, *Saint Ambroise et l'Empire romain*, Paris, de Boccard, 1933, p. 336 sq.
- (12) 第4部第2章, 「貧困と福音」, 261ページ

ルカ伝6章20節「貧しい人々は幸いである、神の国はあなたがたのものである」

マタイ伝5章3節「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」

山中においてキリストが貧者に説いたみ言葉は、新約聖書では二つの引用がある。これらは、あたかも富める者自身が不朽の財を選ぶことによって貧しくなるかのように見える。確かに、誰もみ言葉による解放と歴史上のみ言葉を混同することはない。神の国とは現世界の実現物からは測ることができない。せいぜいのところ、この世界はそのいくつかの輝きを受け取ることができるぐらいである。それどころか、我々は偽らないみ言葉の名において世界が恥じらいもなくうそをつかないように要求すべきである。我々の諸社会は根本的な掟を犯している。すなわち、「汝ころすなかれ」, 「汝、マモンに従ってはならぬ」。

我々の諸社会はこれらを犯す言い訳をするためにうそをついている。キリスト社会だと? ヒューマニストでさえないのに!

De la parole que le Christ adresse aux pauvres, sur la montagne, nous

possédons deux recensions. L'une, plus primitive, est celle de S. Luc (6,20): « Heureux, vous, les pauvres, car le Royaume de Dieu est à vous » ; c'est direct et sans condition : le Royaume est à ceux qui sont pauvres. L'autre, de S. Matthieu (5,3), distingue la situation de la couleur d'âme : « Heureux les pauvres en esprit car le Royaume des Cieux est à eux » ; comme si le riche lui-même devenait capable de pauvreté, en préférant les biens impérissables. Certes, personne ne confond la libération selon la Parole et la libération dans l'histoire. Le royaume est incommensurable aux réalisations de ce monde ; tout au plus ce monde-ci en peut-il recevoir les reflets ; encore devons-nous exiger, au nom de la Parole qui ne ment pas, qu'il ne mente pas effrontément. Nos sociétés violent les commandements essentiels : « Tu ne tueras pas », « Tu ne seras pas soumis à Mammon ». Elles mentent pour se donner des raisons de les violer. Chrétiennes? Allons donc! même pas humanistes !

- (13) アルベルト・イアーネス, 佐藤紘毅訳, 『イタリアの協同組合』, 緑風出版, 2014年, 13ページ。
- (14) アルベルト・イアーネス, 同上, 第2章第4節, 66-69ページ。また, 現代イタリアの協同組合の活動内容と規模については, 佐藤紘毅, 「イタリアの協同組合について」, 『PRIME』, 30号, 明治学院大学国際平和研究所, 2009年を参照。社会協同組合の法制化に際して二つのタイプの事業体, すなわち, 福祉サービスおよび教育サービスの提供にかかわるA型社会協同組合と社会的に「不利な立場の人々」を交えて働くグループとしてのB型社会協同組合が区別された。具体的にはA型は, 高齢者, 障害者, 幼児, 学童, その他問題を抱える人々を施設および在宅で支援・介助・介護する事業を展開する協同組合を指し, B型は社会的に「不利な立場の人々」(障害者, アルコール依存更正者, 薬物依存更正者, その他法律により規定された人々)が構成員の少なくとも30%を占めてさまざまな分野で事業展開する協同組合を指す。B型社会協同組合の具体的事業内容を見ると, 廃棄物分別収集, 施設内清掃, 公園・墓地等の清掃樹木管理, リサイクル事業, 各種工芸品生産販売, 工業製品部品生産, 花卉生産販売, 喫茶レストラン経営, ホテル経営, 等々を挙げることができる。社会協同組合は二つのタイプのどちらにも, 「市民の社会的統合を図り, 人間的向上を図る」という共同体の一般意

志の追求を目的とする」ものである。2005年末現在、イタリア全土に約7,300の社会協同組合が存在し（その内A型約4,300、B型約2,400）、そこではおよそ278,000人が働いている。この年のイタリアの総就業者数は約2,400万人で、およそ1%が社会協同組合関係者ということである。

- (15) 詳細は次の著書を参照。F. PERROUX, *Industrie et Création collective*, P.U.F., 1964, et *L'Economie des Jeunes Nations. Industrialisation et groupements de nations*, P.U.F. 1962.
- (16) 現代の知識人〈原題〉知識人の阿片（論争叢書）/レイモン・アロン/渡辺善一郎『現代の知識人』（『論争叢書』）渡辺善一郎訳，論争社，1960年。
- (17) Raymon Aron, *Mémoires: 50ans de réflexion politique*, Paris, Ed. Juilliard, 1983, 410ページ，奈良和重，『レイモン・アロンにおける《イデオロギー批判》』，「法學研究：法律・政治・社会」，慶應義塾大学法学研究会，1988年，42ページから日本語訳引用。
- (18) 日本ではこのdevelopment（英語）を単なる経済成長economic growthと区別するため，前者を「発展」，後者を「開発」として区別することがある。
- (19) （マタイによる福音書6章6-13，ルカによる福音書11章2-4）聖歌「主の祈り」，「我らの日用（にちよう）の糧（かて）を今日も与えたまえ」フランス語，*Donnez-nous aujourd'hui le pain nécessaire à notre subsistance*，英語，*Give us each day our daily bread*. イタリア語Luca 11:3, *dacci di giorno in giorno il nostro pane quotidiano*.
- (20) 韓国のキリスト教詩人，金芝河（1941-2022年）は「飯が天なのです。オー，飯は，みんなで互いに分け合って食べるもの」と詠んでいる。金芝河の詩，「飯が神」徐南同，『民衆神学の探求』，新教出版社，1989年，147-148ページ，植木献，「キリスト教と食：アジアから提起すべき神学的課題」，アジア神学セミナー，2018年，11月13日，講義の配布資料，1ページから引用。